

世界中が新型コロナウイルスの魔界的な感染拡大に脅かされる中、人びとは不安や恐れにとらわれながらも、これまでの関わり合いのかたとは異なる新しい形を模索する動きを見せている。われわれはそれまでの当たり前が制限されている状況で、たとえば人と集まる機会の尊さをあらためて痛感し、新しい形を模索しながら互いに連絡を取り合うことをやめない。いわば、全人類は共通の課題を前にして、その克服のためにそれぞれが協力し合う必要性があることをあらためて学びつつあるのである。ことばを換えるならば、われわれが新型ウイルスに対して抱く恐怖や不安は、互いに無関心であり続

るもの、形を変えて批評や悪意などをしてしまうものを目の当たりにすると、関わり合う必要のない日常を平穏と呼んでいたかつてのことを懐かしく感じたりもしてしまうのである。心が悪意に蝕まれてしまうことこそ恐れるべきであるのに……。

しかしながら、われわれは過去を取り戻すことはできない、できるのはどうのような未来を目指すのか、その選択だけである。たとえば、コロナ禍を通してわれわれが身につけつつある「他者に対して無関心ではいられない体质」を今後どのように活かしていくのか、これもまた迫られている選択である。このような文脈で、パパ様は今年

「過ぎ去りし年に、人類の歩み
込まれたこれらの出来事は、わ
にお互いをいたわり合うこと
被造物をもいたわることの大切
えていきます…」（2021年世
の日メッセージ）

新型コロナウィルスの脅威にさらされ、1年が過ぎた。社会においても教会においても私たちの日常生活は大きく変わり、目まぐるしい変化は時に心身が対応できないほどの影響を及ぼしてきた。同時に、自身や他者の健康に配慮したり、食べ物にも事欠く状況にある人や、医療・福祉の現場に従事する人のことを考えたりし命の尊さ、人との交わりの大切さを深く思うという変化もたらしたといえよう。例年とは異なる雰囲気の四旬節を迎えていた中、聖書や教皇の言葉をよく読み、黙想する時間となることを願つて、広報委員会からの一文をここに寄せたい。

四句節の默想



カトリック長崎大司教区
広報委員会

〒 852 - 8113
長崎市上野町 10 - 34
カトリックセンター内
TEL 095 - 843 - 3869
FAX 095 - 843 - 3417
振替口座 01880 - 5 - 2699

発行人
山田良秋
印刷所
株式会社 インテックス

家庭を考える特別年

教皇は昨年12月27日（聖家族の祝日）、今年3月に迎える使徒的勧告「愛のよろこび」発表5周年を機に、同文書の考察を深める特別年を開催する旨を明らかにした。期間は今年の聖ヨハネの祭日3月19日から22年6月にローマで開催予定の「世界家庭大会」まで。

A small bird, possibly a sparrow or finch, is perched on a thin, bare branch. The bird has a brownish-grey back and a white belly with dark spots. It is facing towards the right. The background is a soft-focus green, suggesting a natural outdoor setting.

の初めに「いたわりの文化」の構築を提案しているのである。

ことから脱却を迫つたともいえるだろう。

イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御國の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や悪いをいやされた。そこで、イエスの評判がヨーロッパ中に広まつた。人々がイエスのところへ、いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて來たので、これらの人々をいやされた。こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従つた」（マタイ4章23～25節）

2. 名もなき主役たち

姿があり、よろめく者の体を脇から支えながら一歩
に歩む人や、歩く気力を失つてしまつた者を励ます
人もいただろ。自らがこうむる苦労もいとわず
みながただ身近で苦しむ者たちを思いやる気持ちに
突き動かされてイエスのもとに集まつたのだろ。
ただし、福音記者は行為の主体が「誰であるか」
には関心を持たない、ただ「何をしたか」を描こ
としている。実際、殉教者ユスティノスの証しによ
れば、キリスト者の本質はその名称にあるのではな
く、そのわざにあるのである。言い換えるならば、主
語は誰でもよいのだ。苦しむ人をいたわるのは家族
であり隣人であり、あるいは異邦人であり、いやむし
ろ「あなた」であり「わたし」であり、こうしてく
エスのもとでは、みなが互いのことを優しくいたさ
る主役となるのである。

いつもしみの対象であつて、恐れや不安の対象ではないということ。ここにまさに、コロナ禍にあるわれわれにとっての回心の出発点を見いだすことができると思う。他者への敏感さはそのままに、恐れや不安を愛といつしみに置き換えること。もちろん感染症に対する恐れは医療技術の進展がなければ完全に乗り越えることはできないだろう。しかしながら、それぞれが自分の身を守るために恐れと不安を通して自らのものとした「他者に無関心ではいられない体質」は、たとえば今後治療薬の開発などによつて新型コロナウイルスへの不安を解消できた時代がやってきたとしても、いたわりといつしみの文化として残していくかなければいけない。これこそが社会が示そうとする、パンデミック以後の新しい時代への道筋なのだと思う。今年の四旬節は、そのような文化構築のための靈的な準備の時と位置づけることができるのではないかだろうか。心に芽生える恐れや不安が悪意へと変わることのないよう。善意と優しさとをいつも心に準備しておくこと。苦しむ人についても思いを寄せるこ。

これらの人ひとは、ハハ様自身が聖ヨセフといふ人物像を通して語られる普段の目立たない善良な人たちの姿とも重なる。

いつくしみの対象であつて、恐れや不安の対象ではないということ。ここにまさに、コロナ禍にあるわれわれにとっての回心の出発点を見いだすことがであります。他者への敏感さはそのままに、恐れや不安を愛といつくしみに置き換えること。もちろん感染症に対する恐れは医療技術の進展がなければ完全に乗り越えることはできないだろう。しかしながら、それぞれが自分の身を守るために恐れと不安を通して自らのものとした「他者に無関心ではいられない体質」は、たとえば今後治療薬の開発などによつて新型コロナウイルスへの不安を解消できた時代がやってきたとしても、いたわりといつくしみの文化として残していくかなければいけない、これこそが教会が示そうとする、パンデミック以後の新しい時代への道筋なのだと思う。今年の四旬節は、そのような文化構築のための靈的な準備の時と位置づけることができるのでないだろうか。心に芽生える恐れや不安が悪意へと変わることのないよう。善意と優しさとをいつも心に準備しておくこと。苦しむ人についつも思いを寄せるこ。

目指すべき新しい時代の夜明けに、創世記の最後をまとめるヤコブの子ヨセフの言葉を引用する。

西坂で祈りささげる

日本二十六聖人の殉教記念日に



2月5日のミサの様子はこちらから視聴できます。
<https://www.youtube.com/user/NagasakiCollege>

「…しかし長崎の教会は死ぬことはありませんでした」ヨハネ・パウロ2世(1981年)

わたしたちは何を目指すのか③

これから教会の姿

仙台教区司祭 小松 史朗

一本の電話から

昨年10月頃のことであらうか、長崎教区の広報部から、仙台教区本部事務局へ一本の電話があった。震災から10年を迎えて、今の長崎教区へ伝えたいことを悩ましくも長崎教区報の原稿依頼であった。震災から10年を経て、多くの長崎教区へ伝えたいことをひとこと。電話口でわずか数秒思いを馳せただけでも様なことが駆け巡る。いつたん受話器を置くもその後から、頭の隅から離れない顔に、嬉しくも悩まされることになる。今は亡きサレジオ会の吉木眞理一師である。師は、発災当初から長崎教区から派遣され、岩手県の大槌に「カリタスベース」を立ち上げ、その後ベース長として復興支援活動に関わってくださった。2013年に長崎教区に戻る際には、「大槌ベースを頼む!」と言い残し、それ以来、わたしは月に1回のペースで大槌ベースに主日のミサに出掛けることになる。片道3時間半の道のりは決して楽ではないが、吉木師の思いに何とか応えることができたであろうか。長崎に戻られてからも、2016年に帰天するまで、年に2、3回は大槌を訪ね、大槌ベースのスタッフを支え続け、わたしもまた、長崎に2度ほど師を訪ね、3度目は師の葬儀ミサであったことは残念で仕方ない。長崎教区としても震災以来10年にわたって、仙台教区を様々な支えてくださった。亡き吉木師を含め長崎教区からの依頼は断れない。人倫に悖ることはできないと考え、引き受けることにした。

しかしながらわたしは小さな教区の事務局長でしかない。震災から何かを伝えるといつても、大きなことを語れるわけでもなければ、わたしの話が長崎教区の参考になるとも思えない。お茶でも飲みながら、酒でも口にしながら、コロナ禍で思ひがけずにできた時間に、お笑い種に読んでいただけが幸いである。

わたしたちが行つたこと

震災以来、わたしたちが取り組んできたことは大きな意味があるに違いない。敢えて「わたし

が、実は、被災した小さな心に向けられた一人ひとりの優しい心のほとばしり「リストランクニゾーマイ(分からぬ人は神父をつかまえて聴くこと!)」が繋がるところから始まっており、その小さな心の繋がりがそれぞれの組織の長の心と重なり、共に動きを始めていく「ボトムアップ」であったようを感じられる。この点は、日本のカトリック教会が最も自らの持ち物を心と共に差し出す経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考

えているからである。震災が起り、被災した方々のために、何かをしたいと考えた方々すべてがわたしたちなのだ。仙台教区はその心の差し出しの窓口であり、できるだけ皆さん的心が被災地の心に届くように調整したにすぎない。つまりはこの教区報を手にする長崎教区の皆さんもまた、わたしたちに含まれるのである。

このことを前提に、わたしたちの歩みが三つ

の大きな意味を持っていたことを振り返つてみ

日本のカトリック教会始まつて以来

一つは、日本のカトリック教会が始めた「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムは、復興支援の10年を力強く押し続けてきた。

全教区の司教さま方はそれぞれの3管区を挙げて、祈りをもつての精神面での支援、中央協議会を通しての経済的支援、さらに、司祭不足の仙台教区に対し、人的支援を実現させる。男子修道会・宣教会も、司祭派遣により、心を痛めた仙台教区を靈的に支えた。女子修道会は、修道会の垣根を超えて、「シスター・リレー」を結成し、復興支援活動の拠点である「復興ベース」を笑顔と食事で支えた。カリタス・ジャパンは支援活動のための資金援助と復興支援活動の創成期を担う。このように、日本のカトリック教会のすべての組織、人材、資金が仙台教区を通して被災した町々生きる活力を失つた人々に向ける

二つ目は、この活動がカトリック教会の存在意義そのものであり、10年経つた今も、そしてこれからも続くことである。換言すれば教会の使命は「福音宣教」であるが、被災した方々に寄り添う活動が、図らずも「福音を宣べ伝える」ことに繋がつたといえる。

日本のカトリック教会始まつて以来の挑戦は、

全国からのボランティアという名の心の差し出

しの集結を活動に変え、今日まで続いている。全国

のミッション系の学校や事業体からの生徒や様々

な職種の専門家の派遣、各小教区の信徒の方々は

もとより、一般的なたくさんのボランティアが、活動

拠点である「カリタスベース」に集まり、支援活

動を続けてきた。

年齢も性別も生きてきた背景の違いがあるにも

かかわらず、何か役に立ちたいとの同じ志を持つ

方々の集団活動は、普段の生活の中では希薄にな

りがちな共に生きることの喜びや、自らが生きる

ことの意義を見いだすことに繋がり、図らずも、活

動 자체が宣教と福音化に満ちたものになつてい

たのだ。間近で関わる者として感じたのは、「神

の国」の拡がりを見ていたかのようであつたし、

それは、活動に携わった方々も喜びをもつて感じ

ていたはずである。その「神の国」の拡がりを感じ

じることに繋がつたプログラムとして、どこの「カ

リタスベース」でも行つて、「活動の分かち合

い」が挙げられる。ここにカトリック教会の存在意義が隠されている。

活動の分かち合いは、やり方に違いはあるにせ

よ、どのベースでも大切な時間になつていく。そ

の日の活動の中で感じた「一人ひとりの心の機微を

吐露する。普段の生活の中では味わえない自分の

クラムはあたかも「上意下達」のように映るのだが、実は、被災した小さな心に向けられた一人ひとりの優しい心のほとばしり「リストランクニゾーマイ(分からぬ人は神父をつかまえて聴くこと!)」が繋がるところから始まっており、その小さな心の繋がりがそれぞれの組織の長の心と重なり、共に動きを始めていく「ボトムアップ」であったようを感じられる。この点は、日本のカトリック教会が最も自らの持ち物を心と共に差し出す経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々のために、何かをしたいと考えた方々すべてがわたしたちなのだ。仙台教区はその心の差し出しの窓口であり、できるだけ皆さん的心が被災地の心に届くように調整したにすぎない。つまりはこの教区報を手にする長崎教区の皆さんもまた、わたしたちに含まれるのである。

このことを前提に、わたしたちの歩みが三つの大きな意味を持っていたことを振り返つてみた。確かに、使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代教会の姿を見て取ることができたと考えるのは大きさであろうか。確かに使徒たちはたらきは大きいものであったが、キリストが、「平賀司教と小松神父たち」としたが、それは、「平賀司教と小松神父が」ではなく、「被災地である仙台教区が」でもなく、被災した一人ひとりの心に対して、思いもまた、わたくしたちの心に対する経済的支援者であり、実際に足を運んでの支援活動に携わる方々すべてがわたしたちに含まれると考えているからである。震災が起り、被災した方々すべてが、キリストの言葉と行い、そして、十字架と復活を使徒たちと共に体験した人々の心が初代教会を創つたのであり、この「オール・ジャパン体制」で組まれたスクラムの中に初代

青年海外協力隊員として2019年1月、アフリカ・ザンビアへ派遣された木口未優さん。いくつもの貴重な体験を重ねてきましたが、2020年のコロナ禍のため、協力隊員全員に対する帰国指示が下り、日本に戻ってきました。以下、木口未優さんの文章です。

自分を大切にしたい。
ザンビアに行つたことで強く
感じた、私の思い。

1年2ヶ月、毎日「ちょうど
いい」と言われた。貧しい人から
水をちょうどいい、食べ物、お金を
ちょうどいい。ある程度豊かな暮
らしを送っている人からパソコ
ン、スマート。本気で言われるこ
ともあるが、彼らにとっては冗
談やあいさつの一つである時も
あつた。分かっていても、心に
かない態度をとる自分が情

(マタイ28章20節)

新型コロナウイルスの影響により、こ
こイタリアで多くの事が様変わりしてか
ら一年が経とうとしています。

その様変わりした事の一つが現在も続
くオンライン授業の導入でした。それま
で私は当たり前のように大学に行き、授
業の合間にクラスメイトと談笑していました。しかし今、そんな事はすっかりな
くなってしまいました。もちろん、オン
ラインで授業は行われているので、テレ
ビ電話のように画面越しに相手の姿を見
て会話をすることは可能ですが、しかし、
同じ空間と場所にいないため、空き時間
に会話をすることがなくなってしまった
のです。それは、違う寮にいる人たちだ
けではなく、私と同じ寮に住む人たちに
もいえることです。なぜなら、各々が別
の場所(各個人の部屋など)で授業を受
けます。それは、違う寮にいる人たちだ
けではなく、私と同じ寮に住む人たちに
もいえることです。なぜなら、各々が別
の場所(各個人の部屋など)で授業を受
けます。

みことばにふれて[78]
稻田伸也神父
(長崎教区司祭、ローマ在住)



この記事は、許可をいたしました。浦頭教会報『島のひかり』第225号から転載させていただきました。

アフリカへ

青年海外協力隊員として2019年1月、アフリカ・ザンビアへ派遣された木口未優さん。いくつもの貴重な体験を重ねてきましたが、2020年のコロナ禍のため、協力隊員全員に対する帰国指示が下り、日本に戻ってきました。以下、木口未優さんの文章です。

心に、いつまでも、ザンビア

木口未優
(浦頭教会信徒)



けなくて、またイラつく。自分
がこんなにも小さな人間だと知
らなかつた。

「おい！ドナー（寄付者）！」
とすぐ違う人から言われること
もあつた。ザンビアは金銭的に
はアメリカやイギリス、インフ
ラ整備では中国から多くの援助
を受けている。また、中国、イン
ドの企業進出も目立つ。アフリ
カの多くの人にとって、肌の白
さは豊かさの象徴。白人や黄色
人種は皆お金持ち。

病院で勤務している物資

受け、休憩中に直接顔を合わせる
人がいる。「自分は独りぼつ
ちだ」という感覚です。それは日常の何
か。彼らのプライドの低さ、他
人にすぐ頼る態度に、もやもや
したことも数知れず。

しかし、彼らにプライドを捨て
てさせ、競争心を奪い、白人は与
える側、黒人は与えられる側、と
いう意識を植え付けています。
それが結果的に人のためになれ
ばいいんじゃないかな、と思つ
れど、これが今の私の思い。

勢いに任せて書き、ザンビア
の魅力を全く伝えられていませ
んが、ザンビアに、アフリカに、

それが結果的に人のためになれ
ばいいんじゃないかな、と思つ
れど、これが今の私の思い。

それが結果的に人のためになれ
ばいいんじゃないかな、と思つ
れど、これが今の私の思い。